

論 文

地域における子育て支援活動を通じた学生の学びに関する研究  
～学生の“実践的学び”からみる活動意義について～

西村麻希・西村侑香里・田中麻里

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(平成29年9月26日受理)

**A study on the education received by students who have taken part  
in childcare support activities held in the community**  
—The significance of the activities from the perspective of students' practical learning experience—

Maki NISHIMURA, Yukari NISHIMURA, Mari TANAKA

(*Department of Children's Studies, Faculty of Children's, Nishikyushu University*)

(Accepted September 26, 2017)

**Abstract**

Children's Museum, a community childcare support activity, has been held every year since 2009. This year marked the ninth anniversary of its founding.

The activities play a significant role as 'a childcare support center' for children and parents in the community as well as a place of practical learning where students interested in becoming future educators or childcare workers can gain practical learning experience.

This study aimed to determine what kind of practical learning the students who participated in the activities obtained. The study was conducted, using questionnaire surveys

Results suggested that students who intend to follow a specialized career related to children would receive an extremely valuable education. They will gain '*a deepening of their understanding of children*', '*research experience related to child care and educational perspectives*' and also '*the development of workplace skills*' through their practical learning experience.

Key words : community 地域  
childcare support activities 子育て支援  
practical learning 実践的学び  
content analysis 内容分析  
KJ method KJ法

## 1. はじめに

地域子育て支援事業「子どもミュージアム」は、西九州大学子ども学部子ども学科が新設された平成21年度より、継続的に開催している“子育て支援”活動である。

本活動は平成29年5月で、第1回目の開催から丸8年を迎え、開設10年目を目前に、一つの大きな節目を迎えようとしている。

平成29年3月末現在、これまで通算94回の開催を重ね、延べ936家族2817名(大人1456名、子ども1361名)の方々が本活動に参加した。ここ数年の動向として、保護者同士の誘い合わせや口コミによる新規参加も増加しており<sup>1,2)</sup>、このような背景からも、月日の経過とともに本活動が“親-子が集えるひとつのコミュニティ”として、少しずつ地域に根付き且つ周知されてきたことが窺える。

また、近年の取り組みの特徴として、本学キャンパス内での開催だけに留まらず、地域の青少年育成事業団体と連携・協同しての活動をおこなったり、大学近隣の小学校に学生たちが直接出向き、アウトリーチ(出張)型の開催をおこなうなど、地域協同でより多くの方々に周知・参加してもらえるような取り組みがなされている。さらに、平成28年度には新たな試みとして、本学サテライト教室がある「小城市まちなか市民交流プラザ(ゆめプラット小城)」での開催が初めておこなわれ、開設当初と比較すると、より広く地域に開かれた活動へと変遷を辿ってきている。

本活動には、大きなねらいとして2つがある。まず1つ目に「①地域の子どもとその保護者(養育者)に対する“子育て(子育て)支援の場”の提供 [= 子育て支援]」があり、2つ目には「②将来、子どもと関わる仕事を目指す学生に対する“実践的学びの場”の提供 [= 保育者・教育者養成]」である。

前者のねらいに関しては、先述した近年の参加状況の推移や取り組みの変遷からも、概ね達成できていることが窺えるが、後者のねらいに関しては、学生個々が本活動での実践を経て、どのような学びや気づきを獲得しているのか、客観的な知見に基づく検討が十分になされていないのが現状である。

そこで、今回の研究においては、本活動に参加した学生の“学びのあり方”に着目し、実践を通して学生個々がどのような気づきや学びを獲得しているのかを検証するとともに、本取り組みの保育者・教育

者養成としての活動意義について論考していきたい。

## 2. 活動の概要

### 1) 活動目的

本活動開始当初より、「①子育て・子育てのための地域支援活動」、「②地域に開かれた大学づくり」、「③保育・教育者を志す学生の実践活動」の3つを目的として挙げ、活動を実施している。

### 2) 企画・運営体制

各回の企画立案や活動当日の運営については、「子ども学演習 [子ども学科専門教育科目/必修]」を受講している学生(子ども学科3年生)と「子育て支援 [子ども学科専門教育科目/選択]」を受講している学生(子ども学科4年生)が中心となり活動をおこなっている。

なお、活動体制の規模としては、1回の開催枠をゼミ単位で輪番制で担当しており、1つのゼミが原則年間1回の開催をおこなうこととなっている。

### 3) 参加対象者

基本的に乳幼児から小学生までが参加できる企画内容となっており、その対象は幅広く設定されている。企画内容によっては対象となる年齢層や人数が制限されている回もある。

登録制による固定メンバーの参加(年間継続参加型)ではなく、単発での参加が可能な比較的柔軟な体制となっている。参加する際は、原則事前申込みが必要となっている。

### 4) 開催日時

就学前の子どもとその保護者、そして小学生を参加の主な対象としていることを踏まえ、平日(木曜日)の開催と土曜日開催の2パターンを設けている。

活動の時間帯は、平日・土曜日開催ともに午前中となっている(Table. 1)。

### 5) 活動場所

本学、佐賀キャンパス内にある「子育て支援室」「保育演習室」「表現スタジオ」を主な活動拠点としている(Figure. 1~3)。

また、企画内容によっては、「体育館」や「理科学実験室」「美術工芸室」を使用し活動を実施している。

Table. 1 活動スケジュール

木曜日開催	土曜日開催	活動スケジュール	学生の動き
10:15~	9:30~	受付開始	環境設定・会場設営 受付・駐車場誘導
11:00~12:00	10:30~11:45	ミュージアム開催	活動プログラムの実施
12:00~14:00	—	施設開放(木曜日のみ)	片づけ・掃除 振り返り



Figure. 1 子育て支援室



Figure. 2 保育演習室



Figure. 3 表現スタジオ

さらに、近年では学外企画（出張企画）として大学近隣の小学校体育館での開催や、本学サテライト教室（小城市まちなか市民プラザゆめプラット小城）での開催も実施しており、より地域に開かれた場所での活動をおこなっている。

### 3. 研究の目的

本研究では、子どもミュージアムに参加した学生たちが、本活動での取り組みを通して、どのような“実践的学び”を獲得したのか検証することを目的

とする。

そこで今回は、「①実践過程の中で抱いた難しさ」「②本活動を通して学んだこと」の2点に着目し、学生の“実践的学び”のあり方について検証していくこととする。

## 4. 方法

### 1) 調査対象

子ども学科3年生91名（平成28年度開講科目「子ども学演習」履修学生）と子ども学科4年生15名（平成28年度開講科目「子育て支援」履修学生）の計106名である。

### 2) 調査期間

平成28年5月～平成29年1月

### 3) 調査方法および調査内容

各回の活動が終了した際に、アンケート用紙を学生に配布し、「子どもミュージアム」における、自身の取り組みのあり方について個々で振り返ってもらい、子育て支援活動を通して感じたことや学んだことについて記述を求めた。

主な質問項目は Table. 2の通りである。

Table. 2 学生アンケートの項目内容

項目	内容
項目1	子どもミュージアムでの役割
項目2	参加後の自己評価
項目3	活動参加を通しての学び〔自由記述〕
項目4	参加を通しての感想〔自由記述〕

#### 4) 分析方法

本研究においては、実施したアンケートの中でも自由記述に関する項目〔項目3・4〕のみを抜粋し、KJ法に準じるかたちで内容分析をおこないカテゴリー化した<sup>3,4)</sup>。

内容分析をおこなう際は、「①実践過程の中で抱いた難しさ」および「②実践を通して学んだこと」の2点に着目し、分析をおこなった。

なお、分析手続き (Table. 3) をおこなう際は、客観性をより確保するため、本活動の運営・マネジメント全般に年間を通して関与している筆者ら複数で実施をした。

Table. 3 分析手続き

Step 1	ラベルづくり (記述内容を切片化する) 自由記述で得られたものを、1つの内容につき1枚のカードに表記し、ラベル (切片) 作成をおこなう
Step 2	グループ編成 (小項目) 内容的に類似しているラベルを収集する
Step 3	表札づくり 収集されたグループに名前 (表札) をつける グループ編成 (大項目)
Step 4	さらにグループを収集し、大きなカテゴリーをつくる

## 5. 結果

本項では、子どもミュージアムへの参加を通じた学生の“実践的学び”について、「①実践過程の中で抱いた難しさ (困難点)」と「②実践を通しての学び」の2つに分けて、分析結果を記述する (Table. 4, 5)

#### 1) 実践過程の中で抱いた困難点について

本活動を実践していく過程の中で学生が抱いた困難点として、大きく3つのカテゴリーが抽出された (Table. 4)。

まず、1つ目のカテゴリーとして、『子どもと関

わる上での難しさ』が挙げられ、“実際に子どもを目の前にした時の関わりの難しさや戸惑い”に関する内容が集約された。具体的な記述内容としては、「①発達段階に応じた関わり〔例：子どもの発達段階に合せた言葉がけや表現の仕方が難しかった〕」や「②個々の特性に応じた関わり〔例：一人ひとりの特性・個性を考慮しながら関わるのが難しかった〕」、「③立ち振る舞い・表現のあり方〔例：子どもの目線に立って表現することが難しかった〕」といった3項目が抽出された。

次に、2つ目のカテゴリーでは、『事前準備をおこなう上での難しさ』が挙げられ、“活動当日を迎えるまでの準備期間を如何に過ごしていくのか”その事前準備のあり方に対する難しさが集約された。さらに、本カテゴリーを詳しく内容分析していくと、「①時間配分・時間管理の難しさ〔例：限られた時間内で企画・準備をしていくことが難しかった〕」や「②見通しを立てて行動することへの難しさ〔例：優先順位をつけて準備をすることが難しかった〕」、さらには「③プログラム考案の難しさ〔例：参加対象の年齢が様々で発達年齢に応じた内容を考えることが難しかった〕」といった3項目に分類された。

そして最後に、3つ目のカテゴリーでは『スタッフと協同することの難しさ』が挙げられ、ここでは「①連携・情報共有〔例：メンバー間で情報共有をして取り組むことが難しかった〕」や「②自己表現・他者表現〔例：皆で意見や意思を出し合ってまとめることが難しかった〕」、そして「③役割遂行〔リーダーとして自分の役割を遂行していくことが難しかった〕」の3項目が小項目として分類された。

#### 2) 実践を通しての学び

子どもミュージアムでの実践過程を経て、自身の取り組みについて学生個々で振り返りをおこなってもらったところ“実践を通して獲得した学び”として、大きく3つのカテゴリーが抽出された (Table. 4)

まず、1つ目のカテゴリーとして『子ども理解のあり方』が挙げられ、その内容は「①発達段階の理解〔例：発達に応じた配慮のあり方や、発達段階に応じた遊びの設定のあり方を学んだ〕」と「②個別特性の理解〔色々な特性のある子どもがいることを知り、個々の特性に応じた関わりの大切さを学んだ〕」の2つが集約されていた。

次に、2つ目のカテゴリーには『保育者・教育者

としての関わり・対応のあり方』が挙げられ、保育者・教育者（を目指すもの）として、どのように子どもや保護者と関わりをもっていくのか、その姿勢や対応のあり方に関する内容が集約されていた。その中には、「①（保育者・教育者としての）立ち振

る舞いのあり方〔例：保育者・教育者としての距離感を意識することの大切さ、子どもに話しかける言葉の質の大切さなど〕、や「②子どもの視点に立った関わり〔例：子どものペースに合わせて関わることの大切さ〕」、そして「③臨機応変な対応・判断のあ

Table. 4 実践過程で抱いた難しさ

大項目	小項目	内 容
1 子どもと関わる上での難しさ	1) 発達段階に応じた関わり	・低年齢の言葉が通じない子どもたちとどのように接すればいいか難しかった ・様々な学年・年齢の子どもと同時に関わることが難しかった ・子どもの発達段階に合わせた言葉かけや表現の仕方が難しかった
	2) 個々の特性に応じた関わり	・一人ひとりの特性や個性を考慮しながら関わるのが難しかった ・全体を見ながら、困っている子や何か言いたい子に目を向けることが難しかった
	3) 自己表現のあり方	・子どもの興味を引きつけるような言葉かけ、表現が難しかった ・子どもの目線に立って表現したり話したりすることが難しかった
2 事前準備をおこなう上での難しさ	1) 時間配分・時間管理	・限られた時間内で企画・準備を進めていくことが難しかった ・時間管理をおこない効率的に準備をおこなうことが難しかった ・時間配分を考えて行動することが難しかった
	2) 見通しを立てた行動	・見通しを立てて準備を進めていくことが難しかった ・優先順位をつけて行動することが難しかった
	3) プログラム考案	・幅広い年齢層が楽しめる遊びを考えることが難しかった ・発達年齢に応じた内容を考えることが難しかった ・参加対象の年齢が様々でどこに合せていいのか難しかった
3 スタッフと協同することの難しさ	1) 連携・情報共有	・ゼミのメンバー間で情報共有して動くことが難しかった ・ゼミでの初めての活動であり、メンバー同士で情報を伝達しあうことが難しかった
	2) 自己表出・他者理解	・皆で意見を出し合って話をまとめていくことが難しかった ・互いを思い合いながら自分の意思を表現していくことが難しかった
	3) 役割遂行	・リーダーとして振る舞い皆をまとめていくことが難しかった ・自分の役割を遂行しリーダーシップをとっていくことが難しかった

Table. 5 実践を通しての学び

大項目	小項目	内 容
1 子ども理解のあり方	1) 発達段階の理解	・子どもの成長に合わせた関わり方を学んだ ・発達段階に応じた遊びの設定や関わり方を学んだ ・幅広い年齢層の子どもたちと関わるができ、発達に応じた配慮のあり方を学んだ
	2) 個別特性の理解	・子どもたち一人ひとりの個性に合わせた援助や声掛けをすることの大切さを学んだ ・色々な特性のある子どもがいることを知り、個々の特性に応じた関わり方の大切さを学んだ
2 保育者・教育者としての関わり・対応のあり方	1) 立ち振る舞いのあり方	・保育者、教育者として子どもに話しかける言葉の質の大切さを学んだ ・どのような声掛けをすれば、子どもたちに伝わりやすいか考えること大切さを学んだ ・保育者、教育者としての（子どもとの）距離感を意識することの大切さを学んだ
	2) 子どもの視点に立った関わり	・子どもたちのペースに合わせて関わることの大切さを学んだ ・子どもの目線に立ち気持ちを汲み取り、活動に臨むこと大切さを学んだ
	3) 臨機応変な対応・判断のあり方	・子どもの反応を見ながら、臨機応変に対応すること大切さを学んだ ・色々な場面を想定しながら、柔軟に対応していくこと大切さを学んだ
3 企画考案・事前準備のあり方	1) 環境構成のあり方	・子どもたちの安心、安全を第一に考えて行動しなければならないことを学んだ ・活動が妨げられないような環境づくりが必要であることを学んだ ・壁面の装飾を通して季節感を出したり、楽しく遊べるような雰囲気づくりが大切だと学んだ
	2) リハーサルの大切さ	・リハーサルの中で子どもの行動を予測し、視野を広げていくこと大切さを学んだ ・子どもの姿をイメージしながら準備をしていくこと大切さを学んだ ・企画段階から様々な状況を予測し、対応できるように準備しておくこと大切さを学んだ
	3) 協力・連携・情報共有の大切さ	・メンバー同士で情報共有し合い、目的を持って活動すること大切さを学んだ ・一つひとつの行動や準備の目的・意味を考え協力して活動すること大切さを学んだ ・メンバー同士で役割分担をおこない、連携して進めていくこと大切さを学んだ

り方〔例：色々な場面を想定しながら柔軟に対応していくことの大切さ〕がといった3項目が集約されていた。

そして最後に、3つ目のカテゴリーとして、『企画考案・事前準備のあり方』が挙げられ、活動当日を迎えるまでの期間を如何に過ごし、何をどのように企画・準備していくのか、活動運営（マネジメント）していく上での学びが集約されていた。本カテゴリーには、「①環境構成のあり方：子どもたちの安心・安全を第一に考えて行動することの大切さを学んだ」や「②リハーサルの大切さ〔例：子どもの姿をイメージ・予測しながら準備をしていくことの大切さを学んだ〕」や「③協力・連携・情報共有の大切さ〔例：メンバー同士で情報共有し合い、目的を持って活動することの大切さを学んだ〕」といった3項目が、実践を通して獲得した学びとして集約されていた。

## 6. 考 察

ここからは、子育て支援活動「子どもミュージアム」での実践を通して、本活動に参加した学生が“どのような経験として繋がったのか”，さらには“実践過程を通してどのような学びを獲得したのか”について着目し、本活動における実践活動の意義について論考していきたい。

### 1) 実践を通じた“子ども理解の深化”

本研究において得られた結果を概観すると、今回実践をおこなう過程の中で、学生はふとした疑問や困難を抱く場面に直面していたようである。中でも、最も多く挙げられていたのが「子どもと関わる上での疑問や難しさ」であった。アンケート内容にも“どうやったら楽しんでもらえるだろうか”“なぜ上手く子どもに伝わらなかったのだろうか”“計画していた通りになかなか上手くいかない”“あの時どうすればよかったのだろうか”といった声が多く記述されており、企画・準備段階や参加者との直接的な関わりを通して、自ら考案したことを実行することの難しさや子どもと関わる上での戸惑い・疑問を抱いていたことが窺えた。

しかし、このような疑問や困難を抱きながらも、“如何にしたらその課題をクリアにできるのか”“どう表現したら子どもに伝わりやすくなるのか”と、子どもの視点に立ち、且つ広い視野を持って考

え、試行錯誤しながらも取り組む過程の中で、「子どもの発達段階に応じた関わり」や「個々の特性を視野に入れた関わりの必要性」など、子どもと関わる上での大切な気づきや学びを体得していたことが明らかになった。

大方ら（2007）は、「企画していく上での困難さや苦い体験は、今後子どもを指導・養護する教師・保育士になる学生にとって大変貴重な経験になる」と述べており、子どものために何ができるのか、内容と配慮を考えるよい機会になると指摘している<sup>5)</sup>。つまり、実践をおこなう上で大切なことは、身をもって遭遇する様々な疑問や困難、気づきに対して自らが向き合う姿勢であり、学生一人ひとりが子どものよりよい成長や姿を思い描きつつ、模索しながらも取り組んでいく姿勢こそが、深い学びを獲得していく上で、不可欠なものといえるのではないかと考える。

また、学生の“子ども理解”がより深化した背景には、「講義-実践」両輪による学びの結びつきがあったからではないかと考える。実際に本活動に参加した学生の声として“頭では理解していたつもりだったが実際にやってみて改めて学ぶことができた”“授業の中だけでは分からないことを学べた”“身をもって知ることができた”といった記述もあり、講義の中で学んだことが実践の場での様々な直接的な関わりを通して、より深い学びとして繋がりをを見せていたことが示唆された。講義（座学）での学びに併せて、直接見て・触れて・感じ、これまで得た学びと相互に照らし合せてさらに深い学びを体得していく。この「講義-実践」両輪での学び・過程こそが、より深い学びを引き出すものとして、背景にあったのではないだろうか。

### 2) 役割遂行を通じた“保育・教育観（≒子ども観）の探求”

本活動に参加した学生たちは、企画・準備段階から活動を終えるまでの間、様々な役割を担い実践をおこなった。ある時は「ゼミのメンバー全体をまとめるリーダー役として」、またある時は「子どもや保護者の前に立つ者（≒保育・教育者）として」、そしてまたある時は「将来子どもと関わる仕事を指す者として」、状況によってその役割・内容は様々であった。学生アンケートにも“子どもと関わる一専門家として、どのように言葉掛けをしたらいいのか考える機会になった”や“どのような言葉を選び

表現するのか、保育・教育者としての振る舞いのあり方を学べた”といった記述がみられ、このような記述からも、随所での役割遂行を通して、“～として今どうあるべきか（行動すべきか）”“子どもたちに～な体験をしてもらう為に自分には何ができるのだろうか”と思考を巡らせ、実践に取り組んでいたことが窺えた。

つまり、今回の実践を通して“自分はどのような思いを描いて子どもたちと関わりたいのか”さらには“子どもと関わる上で自分は何を大切にしていきたいのか”といった、子どもと関わる上での信念や個々人が抱く思いに学生一人ひとりが向き合い、自らの保育・教育観について探求していくことができる“一つの場”として本活動が機能していたのではないかと考える。澤田ら（2013）は、子どもと関わる体験を通して、学生の子ども観や子育て観がどのように変化するのか研究をおこなっており、その中で「子どもと関わる体験を通して、子どもに対するイメージは全体的にそれまでの子どもイメージよりも強さを感じる方向へと変化する」と述べ、子どもや保護者との直接的な関わりは、“子ども”“子育て”“親”といったものを、より現実的に自分に引きつけて考える機会として繋がっていることを指摘している<sup>6)</sup>。このような指摘からも、実践を通して子どもたちや保護者と触れ合う経験は、“子育て支援”というものをより身近なものとして感じることの出来る貴重な場として繋がっており、これから保育者・教育者としてのアイデンティティを確立していく上でも、貴重な実践の場として繋がっていたのではないかと考える。

### 3) 参画を通じた“現場力（≒実践力）の構築”

本活動の大きな特徴の一つとして、既に決められた活動内容の枠に沿って実践をおこなうのではなく、学生が主体となって企画内容を考案し、実践することが挙げられる。

また、本活動は個人単独での取り組みではなく、小学校教諭・保育士・幼稚園教諭をはじめとする“子どもと関わる専門職”を目指す同年代の学生同士がグループとなり、互いに意見を出し合って、協同で企画・実践をおこなっていくことも特徴の一つとして挙げられる。

実際に活動に参加した学生からは、“みんなで意見を出し合ってまとめていくことが難しかった”“互いに情報共有し合い、目的を持って活動するこ

との大切さを学んだ”といった声もあり、メンバー間で相互に協力・刺激し合いながら活動する中で、仲間との「連携・共有のあり方」や「互いに協力して目標に向かって取り組むことの大切さ」、さらには「自己表出・他者理解（コミュニケーション）のあり方」といった、他者と協同していく上での学びや自分自身の課題への気づきを得ていたことが示唆された。このような、専門領域内に留まらない多角的な学び・気づきは、将来社会に出て相互との関わりの中で色々なことを実現していく上で必須のスキルであり、その基礎力を今回の実践を通して、構築することができたのではないかと考える。

さらに、“如何にしたら子どもが楽しめるのか”“どのような工夫をすればより子どもにも伝わりやすいか”と、企画・準備する段階から、子どもの視点に立ち問いを抱くことで、子どもの行動や反応を「予測する力」や、様々な状況を想定して「臨機応変に対応する力」、さらには様々な可能性を視野に入れて「考える力」など、実際に現場に出て子どもと関わる仕事をしていく上で必要なスキル（≒実践力）を養う場の一つとして、今回の実践が繋がっていたのではないかと考える。与えられた枠にきれいに沿って実行していくのではなく、自ら考えて、判断し、行動していく経験の積み重ねこそが、現場力（実践力）であり、このような経験を通して獲得した学びこそが、現場で生きる“真”の学びとなるのではないかと考える。

## 7. 今後の課題

本研究では、子育て支援事業「子どもミュージアム」に参加した学生たちが、実践を通してどのような学びを獲得したのか、アンケートの内容分析を通して検討をおこなった。質的（記述）データからの分析ということで、筆者らの主観的解釈に依拠するところが大きくなったが、今回得られた記述から、学生らが実践を通して様々な学びや気づきを獲得していたことが明らかになった。

今後は、学生のよりよい“実践的学び”を導き出していくためにも、学生個々人が“実践を通して何を学び、どのように成長し、今後の自分の課題は何なのか”、その一人ひとりの学びのあり方について、客観的に把握・可視化できるような振り返りが必要であり、その方法・あり方について模索・検討していく必要があると考える。

## 参考文献

- 1) 西村麻希・西村侑香里・田中麻里, 『地域における子育て支援活動「子どもミュージアム」に参加した学生の意識の変化と成長について—学生アンケートの内容分析を通じた“実践的学び”の検証—』, 西九州大学子ども学部紀要, 第8号, 1-13, 2017
- 2) 西村麻希・田中麻里・西村侑香里, 『西九州大学子ども学部における子育て支援活動—「子どもミュージアム」平成26年度の活動報告—』, 西九州大学子ども学部紀要, 第7号, 85-92, 2016
- 3) 川喜多二郎, 『続・発想法—KJ法の展開と応用』, 中央公論社, 1970
- 4) 伊藤哲司・能智正博・田中共子, 『動きながら識る, 関わりながら考える』, ナカニシヤ出版, 2005
- 5) 大方美香・栗山誠・渡辺俊太郎・大垣和永・要正子, 『学生の現場力を育成する, 養成校の子育て支援の在り方—こどもフェスティバルに見られた学生の意識の変化—』, 大阪総合保育大学紀要, 第2号, 91-108, 2007
- 6) 澤田英三・上手由香・奥野雅子, 『保育体験は女子大学生の子ども観・子育て観をどのように変えるのか?』, 安田女子大学紀要, 41巻, 103-114, 2013